

## 第6講 歴史学と文化史学

10分間レポートの課題：文化史は何を扱うのか？

### 歴史学におけるギルド体制の伝統

日本の大学：ドイツのベルリン大学をモデル

講座制：正教授を頂点とし、助教授・講師・助手・学生のピラミッド構造

ゼミナール演習による教育

価値観の共有

ドイツにおける教授団ギルドの形成

教授資格試験

異分子のふるい落とし

社会的出自の均質性：プロテスタント・中流市民層

研究領域・研究方法の均質性：外交史

共通の価値観と方法論

### 文化史学と歴史学との葛藤

歴史学の一元主義

19世紀：歴史学とは外交史であった

大学文学部史学科の歴史学と経済学部の経済史・法学部の法制史の併存

内政史や経済史などの排除

これらは歴史学以外の学問領域で研究

経済史は経済学の分野

大学の教員としての地位をすでに有している研究者によって

ブルクハルト：バーゼル大学の教授・美術史の方法を活用・美術や思想の様式的変化を比較し、時代ごとの特質を解明

ランプレヒト：ライプチヒ大学総長・法則性を重視。中世経済史

ウェーバー：フライブルク大学・ハイデルベルグ大学正教授、経済学

ホイジンハ：ライデン大学総長

ワイマール期

オットー＝ヒンツェ：国家法制史、ベルリン大学政治・国制・行政・経済史教授。妻がユダヤ人、オランダに亡命。1940年に死去。

ローゼンベルク：ユダヤ人，ドイツ社会民主党員、古代史。アメリカに亡命、ブルックリン大学教授、社会史学派。1943年死去。

マイネッケ：ワイマル体制支持派。フライブルク大学／ベルリン大学。世界市民思想と民族主義／国家主義との関係を解明。ナチスの圧力で『史学雑誌』編集者を辞任（1935年）。1954年に91歳で死去。

沈黙を守るか亡命

文化史論争：ランプレヒト、社会や文化は類型的の把握が可能・史料主義を批判

ドイツの全歴史家が反対

一元主義に対する批判

文化史もこの様な潮流の中に位置づけられる

歴史学に対するアンチ・テーゼ

### 文化史学に対する偏見

文化という非政治・非経済・非社会領域を扱っているに過ぎない

主観的な美学的解釈に依存

歴史を規定するのは下部構造

生産と生産関係

上部構造に過ぎない

「存在が意識を規定する」という命題

二次的・副次的

現実に役立たない貴族趣味

### 歴史学の多様性

歴史学の主軸の変化

流行・主流の分野の変遷

外交史から社会経済史へ

社会経済史から社会史へ

社会史から新文化史へ

ナタリー・デーヴィス、カルロ・ギンズブルク、ル・ロワ・ラデュリ、ピエール・ノラなど

歴史学の多様化

歴史学の本質についての不明確化

対極としての文化史学の不明確化

歴史学との差異が不明確に

多くの研究が歴史学の一分野として発表され、評価される

社会史のコンセプトと文化史のコンセプトの近似

### 広がる文化史学の地平線

日常史、建築史、美術史、文学史、精神史、教育史、心性史、宗教史、民間宗教史、科学史、音楽史、食物史、住宅史、メディア史、文字史、生活史、生活道具史、アニメ史など・・・狭義の文化を対象文化史学の無限とってよい地平線の広さを証明してきている。